

2 複数の採卵鶏農場で発生した伝染性ファブリキウス嚢病について

ハセベアヤコ
○長谷部文子、岩野良徳（岐阜県中央家畜保健衛生所）

【発生概要】

平成 27 年 2 月、岐阜県内の採卵鶏農場 3 農場 4 鶏舎において、35～43 日齢の雛で羽毛の逆立ちや沈うつを主徴とする死亡数増加事例が発生（死亡率 0.98～2.24%）した。これらの農場は県内の異なる地域にあり、発生時期に疫学関連は認められなかった。全ての群で伝染性ファブリキウス嚢病（IBD）生ワクチン（Lukert-BP 株もしくは D78 株）を 2 回飲水投与されており、Lukert-BP 株に関しては全て同一ロットのワクチンであった。

【材料と方法】

各農場生体を 5～6 羽、1 農場については発症期及び回復期血清各 10 検体を用いて、病理解剖、病理組織検査、細菌検査、ウイルス検査を実施した。

【結果】

病理解剖の結果、共通してファブリキウス嚢（F 嚢）の水腫性腫大が認められた。病理組織検査では F 嚢において間質の水腫を伴ったリンパ濾胞の委縮及び壊死が認められ、抗 IBD ウイルス免疫染色で陽性反応が認められた。細菌検査では、有意菌は分離されなかった。

ウイルス検査では、F 嚢から IBD ウイルス特異遺伝子が検出され、発育鶏卵漿尿膜上接種により IBD ウイルスが分離された。VP2 超可変領域及び VP1 領域の塩基配列を解析したところ、3 農場 4 鶏舎の遺伝子配列は完全に一致し、従来型に分類された。また、本鶏群に投与されたワクチン株（Lukert-BP 株及び D78 株）との塩基相同性は VP2 で 95.2% 及び 95.5%、VP1 で 99.1% 及び 96.9% と低く、最も近縁なのはアメリカ由来の株である 2512 株由来ワクチン株で、VP2・VP1 共に 100% 一致した。ELISA 法による IBD 抗体検査の結果、発症期では抗体陰性の個体が半数認められ、回復期で抗体価の有意な上昇が認められた。

【まとめ】

以上の結果から、これらの事例を IBD と診断した。遺伝子解析結果から、農場で使用しているワクチン株による副反応の可能性は否定された。検出されたウイルスは全農場で一致しており、県内で同一のウイルス株が広く浸潤している可能性、もしくは人や物品の移動など、他の要因により同一のウイルス株が農場に持ち込まれた可能性が示唆された。抗体検査の結果、発症期に抗体陰性の個体が多かったことから、移行抗体の影響やワクチン管理、投与方法などの理由でワクチン免疫が得られなかった結果、侵入した野外株に感染して発症した可能性が考えられた。発生後は、鶏舎内の消毒徹底後に新たな群を入荷する、投与ワクチンや投与時期を変更する等の対策を実施したところ、これまでに新たな発生は認められていない。